

連載

試論・民族総福音化への道 (12)

先ず早天祈禱から ⑫

副総裁兼事務局長

手束 正昭

Tetsuhiko Masaki

(高砂教会牧師)



詩篇五七篇は、その但し書きにあるように「ダビデがサウルからのがれて洞窟にいた時に」(新改訳)詠んだ歌である。ひしひしと迫ってくるサウル王の掃討軍を意識しながら、眠れぬ夜を過ごす中で、必死の思いで祈ることにより、遂に明け方に祈りの内に勝利を確信できたのであった(六節)。そこでその詩調は半ばから、「神よ、わたしの心は定まりました。わたしは歌い、かつほめたたえます。わが魂よ、さめよ、立奏よ、箏よ、さめよ。わたしはしののめを呼びさします(七・八節)」という讚美へと転換している。この「わたしはしののめを呼びさします」という表現は、まだ夜明け前の暗さの中にありながら、ダビデの心の中には既に夜明けがやってきたという信仰の確信の表明であると共に、夜明け前の祈りが「しののめ」即ち「暁」(新改訳)、「曙」(共同訳)を創造していくという意味合いもこめられている。

確かに聖書を読むと、明け方に主なる神は創造的御業を行っていることが分かる。聖書においては、明け方というのは霊的に特別な時として記されている。例えば、モーセがシナイ山で神から「十戒」を授けられたのは、「早朝であった」(出エジ一九・二六)、キリストの復活

が起ったのも「朝早くまだ暗いうちに」(ヨハネ二〇・一)であった。またベンテコステが起ったのは、「何事が起きたのか」と集まってきた民衆に向けて語った、ペテロの「今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない」という言辭から、九時前に起ったかのようには錯覚してしまいがちだが、やはり早朝に起ったと考えるべきであろう。と言うのは、聖霊が降ったのは「みんなの者が一緒に集まっている」時に突然起ったのであるが、何のために弟子達が集まっていたのであろうか。五旬節を喜び祝うためであったとも考えられるが、やはり早天祈禱会を持つためであったと考える方が自然である。その祈禱会の最中に聖霊が降って、人々は異言を激しく語り出し、恍惚状態に陥った。「この物音に大ぜいの人が集まってきた。彼らの生まれ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれかれも聞いてあげに取られた」(二・二六)と記されているが、弟子達が早天祈禱会を始め、聖霊が降り、恍惚状態が起って、人々が何事かと集まり始め、遂に大勢の人々が集まってきたというわけである。そこで、ペテロが釈明の説教を語り出すのであるが、そのためには、少なくとも三

時間以上は経過していたのでなからうか。すると、「朝の九時」から三時間以上前となると、早朝の五時あるいは六時という時間帯であったと考えられる。つまり、ベンテコステも早朝に起ったのである。

要するに、主なる神は明け方に大事な御業を起ささせるだけでなく、明け方に自らの意志を明らかにし、応答して来られるのである。会報誌の八号でも書いているように、私が教会史上最最大の危機を脱し得たのも、夜明け前に主からの語りかけを聞いたことによつてであった。詩篇五七篇においても、ダビデも夜明け前に主からの勝利の確信を戴き、大きな喜びを以て主を讚美していった時、夜が明けて間もなく、サウル軍は次々と撤退していったのである。イスラエルの宿敵ペリシテ人が領内に攻め込んできたという報に慌て、サウル王はエルサレムに戻っていったのであった。

韓国ではどの教会でも早天祈禱会を行っていて、「早天祈禱会を行わないような教会は教会ではない」と言われる程であり、その早天祈禱の力が韓国キリスト教化の原動力であることについては既に指摘した。そしてそこには、日本のキリスト教の教養的、道徳的キリスト教とは異なる、霊的キリスト教の伝統があることを指摘した。しかし、もう一つの理由がある。それは、一九五〇年六月から始まった朝鮮戦争以来の「北の脅威」に対するクリスチャン達の危機意識にも起因している。朝鮮戦争で数千人の牧師が殺され、二十万人以上のクリスチャン達が殺された。そして夥しい数のクリスチャン達が北から南へと逃げてくることになった。この日本民族総福音化運動の「生みの親」とも言うべき申賢均牧師もそのうちのひとりである。

かくて、韓国のクリスチャン達は虎視眈々と南進を狙っている「北の脅威」を阻止するために、朝早く起きて教会に行き、必死に神の加護を求めざるを得なかつたのである。恐ろしい共産主義の攻撃を防ぐためには、全能の父なる神の御手に頼る他はないという危機意識こそが、韓国のキリスト教の霊的伝統と相俟って、あれ程までに韓国における早天祈禱の隆盛をもたらした社会学的理由であった。その結果、北朝鮮の頭初めはほとんどと見え、一方韓国の繁栄が実現したのである。これは、韓国のクリスチャン達の祈り、殊に早天祈禱のもたらした勝利に他ならなかつた。

ところが十年程前から、「南北和解」の政治的演出が起り、韓国にとつては、「北の脅威」は急速に消失し、むしろ親北のムードが韓国社会全体を覆っていった。このことは「見大変良いことのように見えながら、実は霊的には韓国のキリスト教を衰退へと導く異となつている。殆どの教会で早天祈禱出席者は激減し、それに伴って教勢の頭打ちから減少へと転じていっているのが現在の状況である。私達日本の教会は、このような韓国教会の推移を「他山の石」とし、早天祈禱の運動を進めることの重大さを、しっかりと認識しながら、日本の国家再建の重要な鍵を握っていることを然と汲み取っていくべきである。